

### 「本」に新たな「命」吹き込み



▲  
仲間と談笑しながら、ひのきしんに励む市村さん（左）（京都市内の自宅で）



書室に並ぶ本棚から、傷んだ本をテーブルに集める。1冊ずつ手に取り、色が剥げている箇所には色鉛筆を当て、破れた背表紙を補修テープで丁寧に補強していく。

「本がすぐ傷んでしまうのは、それだけ子供たちがたくさん読んでくれた証拠なのよ」

ボランティア仲間の若い母親たちと談笑しながら、市村真理子（68歳・明四十一分教会教人・京都市）は話す。市内の小学校の図書室で週1回、10冊前後の図書を修理している。

12年前、長年、人工透析を続けてきた夫が息を引き取った。

「腎不全を患ってから、18年も長生きをさせてもらった。そのご恩返しをしたい」『天理時報』で「ひのきしんスクール」の広告を見つけたのはその矢先。いくつかの講座を受講する中で、図書修理に出合った。

「傷んだ本が、見る見るうちにきれいによみがえっていく技術にビックリして」

毎年のように講座を受けるなか、自宅近くの小学校の了承を得て、月に4、5冊の本を自宅へ持ち帰って修理するようになった。

それから2年。いつものように向かった学校で「図書ボランティアグループを立ち上げるので、手伝ってもらえませんか」と声をかけられた。

「自分が教わった技術を役立てられるなら」と、二つ返事で引き受けた。

当初、図書室には、ボロボロになった本が段ボール数箱分もあった。早速、仲間らに図書修理の方法を一から教え、図書室の整備に努めた。

「そこには、この補修テープを使ってみて」。作業に戸惑っている仲間を見つけると、そっと声をかけ、アドバイスをする。

「みんな私の娘と同世代。図書修理のことだけでなく、いろいろなことを相談してくれる。娘たちと話しているようで楽しくて」。いつしかグループ内のお母さんの存在になった。

「ひのきしんを続ける中で、元気に体を動かせることに感謝して通ることが、親神様へのご恩返しにつながるようになるようになった。修理した本がまた傷んでいるのを見つけると『ああ、子供たちがたくさん読んでくれたんだ』って、かえってうれしくなります」

修理した本を眺める目は、わんぱく盛りの子供の傷の手当てをする母親のように、優しく、温かい。